

現代の楽器と向き合いながら、19世紀作品の素顔へ

白沢達生（翻訳家・音楽ライター）

私が初めてネルソン・ゲルナーの名前を強く認識したのは、ショパン国際コンクールの主宰元であるポーランド・ショパン協会のレーベルから、19世紀モデルの歴史的ピアノを使った録音をリリースした時でした。ご存知の方も多いと思いますが、ポーランドのショパン協会は近年、20世紀から静々と世に広まってきた「作曲家と同じ時代の人々が知っていたモデルの楽器を当時流の奏法で弾いてこそ、曲の真意に迫った演奏



ができる」という古楽器演奏のムーヴメントを受容して、かのピアノの詩人が知っていた19世紀当時のピアノに注目、歴史的ピアノを使っての演奏を対象としたコンクールも新たに発足させるほど古楽器演奏に重きを置いています。その流れのかなり早い時期に、彼らの思いを深い音楽性で受け止め形にしてみせた一人がゲルナーでした。玄妙な楽器の響きの魅力や歴史的価値の重みに溺れることのない、真の古楽器奏者たちに連なる確かな演奏でショパンの素顔の一端を垣間見せてもらった思いがしました。同じタイミングで、同じようにゲルナーが気になり始めた人は私の他にも少なからずいるのではと思っています。今から15年ほど前のことでした。



ゲルナーがもたらした驚きはそこで終わりませんでした。やがて彼は、フランスの小規模良質レーベルALPHAからソロ録音を出すようになります。ショパンの『24の前奏曲』、ベートーヴェンのハンマークラヴィーア・ソナタやバガテル、再びショパンで今度は夜想曲集……作曲者が知っていたモデルの歴史的ピアノにアクセス不可能ではない時代の音楽ばかりですが、彼はその全てを歴史的ピアノではなく、あえて現代ピアノを使って録音していたのです。

その後はラフマニノフやパデレフスキら19世紀末のピアノ協奏曲(!)など、ハンマークラヴィーア・ソナタどころではない重量級のレパートリーまで録音が世に出てきました。

私たちを最初に驚かせた、演奏に特別な修練や時代背景への見識が必要となる歴史的ピアノを使いこなして作曲家の真意を探るゲルナーはどこへ？ と当初は軽い衝撃を禁じ得ませんでした。その当惑は全く的外れだとすぐにわかりました。

現代ピアノを弾いていても、彼のタッチや音楽作りはあくまで繊細であると同時に、ショパンでもベートーヴェンでも、作曲者と同じ時代のピアノを知っていればこそその緩急の付け方、音色のイメージが感じられるのです。細やかなタッチを克明に音に反映させやすい現代楽器ならではの精密さを、彼は自身のファンタジーの発露に活かすのではなく、歴史的ピアノを通じて探り当ててきた、作曲当時の音像の克明な再現に役立てているのです。

どっしりした表現が似合いそうな演目でも、パワフルなフォルティシモの迫力に頼るよりもむしろ、弱音の音色美を自在に描き分けられる現代楽器ならではの強みで、鉄道や交通渋滞の轟音に慣れき

っている私たちをはっとさせるような囁きを、楽器内で響かせている音が漏れ聴こえてくるような味わい深い弱音の魅力を伝え、100年以上前の人々の暮らしや日常感覚にまで思いを馳せるよう、それとなく仕向けてみたり……。解釈設計の明瞭さも、作品の構造をよく捉えていればこそ、そしてその見通しを的確に音に反映させられる作品理解があればこそではないかと感じられます。音符の並び、配列、旋律の流れや和声の動きなど、作曲家たちが当時のピアノを前提に考えたであろう音の真意を考えているから、そしてそれを形にできる圧倒的な技量があるから、音運びにも自ずと説得力が生まれます。歴史的ピアノで培った知見が、現代ピアノを通じて作曲家の真意に迫ることに活かされているのです。



「アルゼンチン出身のピアニスト」という括りで考えると、ゲルナーの前には彼を激賞したマルタ・アルゲリッチやブルーノ・レオナルド・ゲルバー、ダニエル・バレンボイム……と、日本のクラシック音楽の世界を古くから熱狂させてきたピアニストたちの名が思い浮かびます。その一方で、南米大陸の国々でも古くからのヨーロッパ文化にひとときわ親和性が高いこの国は、18世紀以前の音楽を専門とする古楽器奏者たちが楽器を問わず多く、欧州シーンの第一線にある団体の中核メンバーとして活躍をみせているプレイヤーも少なくありません。そうした状況のもと、歴史的検証だけで終わらない古楽器演奏の新時代にくみするアルゼンチンの演奏家の一人としてネルソン・ゲルナーを位置づけることも可能でしょう。作曲家の思い描いた音像に迫りたいという関心から古楽器演奏を好む人たちにとっても、現代ピアノで歴史的ピアノ的なアプローチをとるゲルナーの演奏は「昔日の音楽作品に触れる」ということについて、少なからぬ発見をもたらしてくれるに違いありません。



歴史的ピアノは、その圧倒的な存在意義に比して、現代のピアノ演奏者人口に対してはまだまだ圧倒的に絶対量が少なく、世界中でアクセスできる人が限られているのが現実です。そうしたなか「歴史的なピアノの音のイメージを適切に認識できてさえいれば、19世紀以前の鍵盤音楽の造形を現代式のピアノで捉え再現することもできる」ということを強く認識させてくれる高水準の演奏に触れられるのは、手を伸ばせば届くところに歴史的ピアノの現物があるわけではない多くの音楽愛好者たちにとって、どれほど心強く意義ある体験となりうるのでしょうか！

ネルソン・ゲルナーは1月15日、浜離宮朝日ホールステージに登場します。

何か物語めいたものを感じさせながらも具体的な筋書きが言葉で書かれているわけではないショパンのバラード4曲、そして聴く者をなんとも不思議な和声の迷宮へと誘うリストの長大なロ短調ソナタ。いずれ劣らぬ難曲を、ゲルナーの10指がどのように解きほぐしてゆくのでしょうか——その実演に触れるとき、私たちの心は各曲のどんな魅力の一面に気づかされ、虜にされてゆくのでしょうか？何かしら現時点で想像している以上の観賞経験になるであろうことを確信しながら、演奏会当日を心待ちにしていきたいと思う次第です。

ネルソン・ゲルナー ピアノ・リサイタル 2023.1/15 (日) 14:00 浜離宮朝日ホール
ショパン：4つのバラード／リスト：ピアノ・ソナタ ロ短調 ¥7,000
<https://www.asahi-hall.jp/hamarikyu/event/2023/01/event2256.html>